

# 学びの質の保障と検証

東大附属における「学びの共同体」の  
振り返りを中心に

南風原朝和

# 学校としての取り組みが 求められる状況

- 公立の中等教育学校は，入学者の決定にあたって，学力検査を行わないのが前提  
→ モデル校としての東大附属も
- 学力の幅の広い入学者に高等学校課程までの学習を保障しなければならない
- 現実問題としての「中だるみ」や「学習不振」

# 学校として取り組むうえでの 東大附属の特長

- スタッフ構成が安定
  - 長期的取り組みが可能に
- どの教員も中高の両方を担当
  - 6年間を見通した取り組みが容易に
- 研究校・実験校・モデル校という外からの期待
  - 使命感とモチベーション
- 大学教員からの指導・助言が得られやすい
  - 連携研究委員会も設置

# 東大附属の教育の特徴

- 総合的な学習の重視

総合学習入門 → 課題別学習 → 卒業研究  
(1, 2年)                      (3, 4年)                      (5, 6年)

- 集団行事・自治活動の重視

- 三者協議会

「学びの共同体」導入の素地は以前から

# 三者協議会



# 「学びの共同体」の導入（2005年）

## 【授業】

- ① 1時間の授業の中に小グループ活動を取り入れてみる。
- ② 生徒を男女4人のグループに編成し、机をコの字型に並べて授業を試みる。
- ③ 少人数授業の時にも行う。

# コの字型の配置



# 男女4人のグループ活動



## 【授業観察】

- ① 生徒の学びを中心に見てゆく。
- ② 生徒の学びを見る視点は、教師の指示・指導によって生徒がいかに学んでいるかである。
- ③ ビデオで生徒を撮る方法をすべての教員が身につける。

## 【授業検討会】

- ① 1時間の授業について約2時間かけて検討する。
- ② 授業の中でひとりひとりの生徒がいかに学んでいるかが授業検討会の主題である。
- ③ 生徒の固有名詞で語り合う。
- ④ 教科の枠組みを超えた視点で話し合う。

# 授業検討会



## 【公開授業と授業検討会の計画】

- ① 学年主任が中心となり，学年会で授業公開と授業検討会の計画を立て職員室の学年黒板に掲示。
- ② 前期と後期に，前期課程と後期課程のそれぞれ1クラスの授業を全員で批評し合う校内研修会を行う。

# 「学びの共同体」に関する振り返り

- ・2008年10月実施の全教員アンケートから

## 【実践の状況】

- ・毎時間行っている……………12人
- ・学習内容によって行っている…24人
- ・科目によって行っている…………… 3人
- ・学年によって行っている…………… 4人
- ・行っていない…………… 0人

## 【改善された点 － 生徒について】

- ・主体的に学ぶ姿勢が身についてきた。
- ・考えることや解決の過程を楽しむ生徒が増えた。
- ・協力して課題に取り組み、学習に集中できるようになってきた。
- ・授業に参加できない生徒がいなくなった。
- ・「こんな生徒が・・・」と思うような成績・学力の生徒でも難しい課題に取り組んでいる。

## 【改善された点 － 生徒について（続）】

- ・班活動がスムーズになった。
- ・生徒どうしの教え合いが自然にできている。
- ・学校が落ち着き、生徒が穏やかになった。
- ・寝る生徒が減った。
- ・話を聞く時間と話し合いをする時間のけじめが  
つくようになった。
- ・「わかる」「わからない」が差別化になるのではなく、コミュニケーションのきっかけとして作動している。
- ・多様な考え方があることを生徒が知ることができる。

## 【改善された点 — 教員・授業について】

- 授業中にケアする姿勢が身につき、取りこぼしが減った。
- 生徒主体の授業のため、いい意味で教員が楽になった。
- 他の教科の授業への参加がとても実りある。
- お互いの授業を見やすくなった。
- 生徒の様々な面が見られるようになった。
- 教員どうし、お互いを理解し尊重するようになった。

## 【その他の意見】

- 単元の導入で新しい用語など基本的なことを教える段階では、やりにくい。
- 抽象的な内容が多い場合は不向きである。
- 説明のときは、座席を前に向けて一斉授業形態とするほうがよい。
- コの字型では授業に集中しないことが多い。
- 「学びの共同体」用の教材準備の時間が確保できない。
- 生徒が自分で考えないで、人に聞けばいいという態度になることがある(友人からの「教えて教えて攻撃」に保護者からも意見)。

## 【その他の意見(続)】

- 個人でじっくり考えて解くことも必要。
- 自分自身と向き合う学習をさせたいときは適さない。
- 話し合いに参加しようとしなない生徒の指導が問題である(グループへの参加が苦手な生徒も)。
- 話し合うことで満足してしまうケースがある。
- その教科の得意な生徒とグループになりたがる。
- 生徒に落ち着きがなくなっている。

## 【今後について】

- ・前期・後期課程ともに続ける……………18人
- ・続けるが、これまでの経験から  
本校に適したバージョンを  
作っていく……………20人
- ・各先生方のやり方に任せる…………… 4人

# 生徒の声から

- ・活動が入ると面白い。
- ・わかっているところを出し合い，助け合っている。
- ・わからないことも友達には恥ずかしがらずに聞ける。
- ・班によって当たり外れがあり，成績に影響する（「運命共同体」）。
- ・グループになるとテレビの話とかしてしまう。
- ・うるさいグループがいると，先生の話が後ろのほうまで聞こえない。

# 学習への効果はどうか

- ・教員による振り返りでは、学習成績そのものへの言及は多くない。
- ・成績会議に各学年・教科から提出される“学習不振者”の数には顕著な効果は見られない。
- ・しかし，“学習不振者”の数は、年度ごとの入学者の層の変動や評価基準の影響を受けるため、教授法の効果を直接に検証するには、そのためのデザインやデータについての検討が必要。

# 効果検証のためのデザインとデータ

- 入学時からの継続的かつ多面的な評価データの収集
- 変化をとらえることのできる尺度を備えていること
- (双生児データとあわせ) データベース化
- 双生児法を部分的に導入した比較実験(準実験)の可能性の検討
- テストでは測れない側面への目配りも
- いくつかの克服すべき課題あり

# 今後に向けて

- 「学びの共同体」実践のこれまでの蓄積を活かし、振り返りをふまえて、生徒の学習過程に焦点をあてた、実証的かつ柔軟な取り組みを
- 「没頭・集中」を生む授業づくり(秋田, 2009)
- 異学年間の教え合い／学び合いの模索
- 教員の教科の力量向上のための研修機会を